

越谷市議会議員

大石 美恵子 様

本日このような機会を与えて下さったことに感謝致します。ありがとうございます。簡単に自己紹介させていただきます。私は福島県双葉郡葛尾村という母の実家で生まれました。それからすぐに引越し、福島県南相馬市小高区で23歳まで育ちました。そのあと実家の兄と喧嘩し、東京の姉を頼って上京。お見合い結婚して27歳の時、越谷市に脱サラした夫とモスバーガーを経営しました。世話付きなおばちゃんが店の事以外にいろいろ地域のことをやっておりました。究極は、ネパールの孤児院にボランティアで慰問に行くというようなこともしまして、夫にかなり怒られていました。

震災のときは厚生労働大臣をやっておりました細川律夫衆議院議員、そして今は越谷市長であります。当時の高橋務県会議員、その人たちの力で市議会議員に当選したのが2003年、10年前のことでございます。そしていま3期目をやらせていただいておりますが、2011年3月11日のことからお話をさせていただきます。

私はそのとき、ひとりで市議会の会派におりました。大地震で、すごく揺れまして、駐車場で全員避難ということで、役所の方たちと駐車場ですべて時間を過ごして避難しておりました。避難が解除になってから車であちこちお見舞いに回って、夜自宅に帰ったら、我が家がひどいことになっておりました。驚きました。テレビを見てはじめて、自分のふるさとが全部なくなっているというような情報を得ました。もちろん電話もなにも通じない状況で、これはどうしたことだろうと。自分の部屋もストーブが倒れて、石油がこぼれて、書類もバラバラで自分の仕事部屋にいる事が出来なかったのも、リビングですべて夫と寝ることになりました。

それから私も本当に愕然としまして。自分のふるさとがテレビの映像で見える限り、なんということだと理解出来ず、つらくてなにも手につかなくなりました。そこで最初に電話をかけたのが、私を市議会議員として支えてくれたその当時の厚生労働大臣だった細川さんや高橋市長でございます。なんとか越谷市に避難者を受け入れてくれということをお願いしました。

それから越谷市が動いてくれました。18日からは、老人福祉センターに避難者を受け入れる体制が出来ました。そこに100人規模で受け入れることになったのですが、原発の30キロ圏内の人たちだけと決められて受け入れたので、それ以外の方たちはダメですということでした。そして老人福祉センターすくのき荘はとても立派な新しい施設なので、良いところなのですが、そこには被災者の人たちだけを受け入れ、あと越谷市民は入ってはいけませんというふうに隔離されました。

そこで私は、市役所にある震災対策本部の門をたたきまして、「私は自分の故郷の人たちに会えるかもしれないから議員としてここに入らせていただきます。」ということで強引に入らせていただきました。そしてそこにいる被災者の人たちに声をかけました。それはも

ちろん福島弁です。こんな風に言いました。『おらは小高町出身の大石っていうもんだけど、なんか、私にできることねえかい？なんでも私らに言ってくんちい』って言ったらば、被災者の人たちは、だれも私に返事をしてくれない。「なんでもやります」って言ったらば、皆さんが「屋根がある、布団もある、ふろにも入れる。なにもいらねえだよ」って言うんですよ。「もうそれだけで十分だ」と言ってなにも要望はしませんでした。

それから、心痛めながら何日間か通ってから、「温かいカレーライスでも食ってみてえな」と言ったので、「ああそうか」と思って、いま一步会の事務局長をしている、安齋作子さんという友だちがいるのですが、彼女に応援を求めて、お米や野菜とか肉とかお菓子とか、買ったり、いただいたり、安くしてもらったりしながら、老人福祉センターにそれを持って行きました。そして下の調理室を、初めて使うことができたんですよ。老人福祉センターには調理室も洗濯機もあるのに、それを使わせてもらえなかったんですよ。役所からは、洗濯はコインランドリーを使うよう紹介されました。それまでの食事は、アルファ米を朝だけは提供しました。あとはコンビニをご案内しましたから大丈夫ですって役所の人に言われるんですよ。その中で、私のふるさとの人がどんなに心細く、寂しくしていたかと思うのですが、カレーライスの材料を持っていったら、初めて調理場を使えるかなって役所の人に申請して、調理室を使わせてもらいました。それからみんなで料理をしました。「大石さん割烹着でもあったら良かったね」と言われ、そうか、なにもないんだと本当にぐさっと来ましたね。そんなわけで、カレーライスがもとで、はじめて、その老人福祉センターに入って何日も経っていますが、被災者の方々同士の会話ができたそうです。その中には入れ替わり立ち替わりありますが、30 数名の方がいました。家族同士でも少ない会話。ましてや隣のなんとかさん、苗字を知ろうともしない人たちの会話なんか誰もしようとしません。なんにも言えない。そして老人福祉センターにある大きな立派なテレビ、それをみんなで黙って見ながら、ひたすら新聞を読む。じっとしている。早くから寝てしまう。そういう生活が強いられておりました。

私は民主党の議員なので、今の参議院議員の大野もとひろさんが我が家に見舞いに来て下さいました。「どうされていますか」と聞かれたので、私は「自分の故郷が無くなってしまって、つらくて、なにも考えられない。動くことが出来ない」と言ったら、大野先生が「3月26日に、国会議員の有志で、南相馬市に入って調査することになったから、大石さんもいきますか」と聞かれ「はい行きます」と言って26日の深夜1時大野先生の車で南相馬市に入りました。そうして26・27日の2日間、そのときは、現状を見たり聞いたりして、その当時の与党は民主党でしたから、民主党として何が出来るかということ进行调查しました。そのときの写真もたくさん撮ってありますので見ていただきたいなと思います。

3月末に被災者の方々には老人福祉センターを出なくてはいけなくなりました。当時そこには36人いたのですが、みんな市内の住宅に入ることになりました。そこでみんなバラバラの場所で暮らすのはつらいなあということで、じゃあここから一步出たから、ここで「浜通り一步会」を立ち上げよう、ということで、檜葉町出身の、新妻敏夫さんという人が会

長になってくれて、36人で「浜通一步会」が生まれたわけでございます。後日、福島県以外の方々も会に入りたいとの意見もあり、「浜通り」を取って「一步会」という名称になりました。

私は3月末から4月にかけて統一地方選挙がありまして、3期目の選挙に向けて動かなくてはなりません。まず県会議員選挙の応援。そして自分の市議会議員の選挙が4月にありましたが、その準備の中で私が一番大事だと思ったことがあります。いま着の身着のまま、大至急逃げろと言われてなんにも持たずに車で逃げて、「2、3日くらいで帰られっぺな一」ということで、原発から逃げた人たちがたくさんいたということです。その人たちを老人福祉センターに入ってもらったは良いものの、一定の期間が過ぎたら、その人たちは「さあ出てください」と言われて、アパートとか、越谷市の市営住宅に入りました。もちろん無料で貸してくれたのはありがたいです。私も被災者の人をそのアパートにお連れしました。綺麗なアパートでしたが、綺麗すぎて、なにもない。だからまず物を集めました。蛍光灯、カーテン、それから布団だ、お釜だ、茶碗だ、ほんとうになにもないところでさあ暮らしましょうと言われることを、どうか想像して下さい。

すぐに6月の議会になりましたが、一般質問の中で私は、市がなぜ、市営住宅を何も無い状態で貸す気になれたのかと質問しましたら、「普通の人にはガスレンジはつけてないけど、普通の市民に貸すよりかはガスレンジをひとつつけただけでも凄くやりましたよ、普通の人より良い待遇です。」という答弁をいただきました。あららら、というような答弁ばかりでした。6月議会、被災者の方を思っていた一般質問も、他の議員たちに、あまりいい反響はありませんでした。大石は、ひとりでなにを力んでいるんだという感じでした。そしてある議員からも、大石は越谷市の税金つかって、なんで被災者の人、越谷市民でもない人たちになにをやっているんだと言われました。

ここで私は、皆さんにまとめとして言いたいのは、人の立場になって、逆の立場に立って考えてほしいということです。もしも自分が身ひとつで避難することになったらどうしてほしいか、そう思ったら自分が何をしなくちゃいけないか分かるじゃないですか。だから、私は人のために生きていこうとすごく思います。私もいつまで生きるかわかりませんが、今は命をいただいています。その命をどうやって使うかは、自分で決めていいわけです。だったら人のために生きていきたい。凄くそう思います。

私は写真を撮ることが好きなので、生きている人たち、写真一枚もなくなってしまった人もたくさんいるので、一生懸命その方々の写真を撮ってさしあげています。だから自分のできることを、自分に与えられたことを、それを日々精一杯生きていって、誰かのために生きていこうと思っております。

被災者の方々も本当につらいと思います。でもそれこそ、自分のためだけでなく、また人のため、子どものためでも良い、隣の人のためでも良い、誰かのために生きることをつづけていっていきたくと思います。そしたら本当にみんなで手をつないで、平和な日本、平和な世界になるのではないかといつも思っております。議員として本当になにが出来た

のか、心配でありませんが、議員である前に人でありたい。そんな想いで生きております。